



南スーダン事務所のスタッフたちと田口さん(左端)。現地スタッフと日本人、14人で力を合わせて奮闘している

## 教育を軸に、南スーダンの国づくりに貢献したい

日本での教員経験を生かし、アフリカなどで教育分野の支援に携わってきた田口晋平さん。2011年に独立を果たしたアフリカの南スーダンで、現地の人々に平和への道筋が開けるよう、支援に奔走している。

### 教員経験を生かして国際協力の現場へ

高校生の時、大学受験の勉強になればと、何気なくBBCニュースを見ていました。そこで初めて、世界には学校に行けず、家族のために働かなければならない子どもたちがいることを知ったのです。自分がいかに恵まれた環境にいるかに気付き、もどかしい気持ちでいっぱいになりました。

大学卒業後は地元の中学校の教員になり、毎日が怒涛のように過ぎていきました。5年目に入り少し余裕が出てきたころ、日本以外で教員経験をかせないかと考え、青年海外協力隊に参加。南アフリカで、理科の教員に向けた研修会などを企画しました。当時はアバルトヘイトの名残もあり、現地の教員は免許を持ちながらも指導経験が浅く、教えるのもままならない状況でした。

研修会では学びの場に飢えていた教員たちの反応に手応えを感じる一方、一人のボランティアにできることは限られていると痛感したのも事実。「もっと多面的にインパクトを生み出す仕事をしたい」と思い、JICA A専門家としてケニアに赴任しました。現地の人たちと頭を悩ませながら、日本の教員研修のモデルをケニアの実情に合わせて機能する形につくり直す作業に取り組み、日本と開発途上国両方の現場を経験していたことがとても役に立ちました。

### 不安定な騒乱の中で好循環を生み出す協力を

日本の教育現場を離れ、途上国の教育に携わって6年、もっと広く物事を捉え分析する力が必要と感じて、アメリカの大学院に進学しました。世界各地の教育政策に関する多様な研究手法を身に付けたかったのです。

そして修了後、社会人採用枠でJICA Aに就職。現在は南スーダン事務所、総務や安全管理業務に加え、教育分野のプロジェクトを担当しています。2011年に独立を果たした南スーダンでは、数十年にわたり続いた内戦の影響で、就職につながる技能を学ぶ機会がほとんどありません。人生の大半を難民キャンプで過ごしてきた人々が大勢いる中で、彼らが職業訓練を受けられるよう、職業訓練校の設置やカリキュラムの作成、インストラクターの研修などに、現地の政府と共に取り組みました。

しかし、2013年12月から各地で断続的に銃撃戦が勃発し、国外への避難を余儀なくされてしまいました。南スーダンでの事業が軌道に乗り始めた矢先の出来事だっただけに悔しい思いをしましたが、昨年11月には避難勧告のレベルが下げられ、首都ジュバに戻る事ができました。現地の政府や住民から「よく帰ってきてくれた」という声をたくさん聞き、私たちが現場に身を置く意義を実感しました。



JICA南スーダン事務所  
田口 晋平  
TAGUCHI Shimpei

大学卒業後、数学の教員として中学校で勤務。青年海外協力隊、JICAジュニア専門員、JICA専門家を経て、アメリカで国際教育政策の修士号を取得。2013年から現職。



南スーダン労働省職業訓練局長とプロジェクトの方向性について打ち合わせ

大変な時だからこそ、人々に寄り添い、支援を継続していくことが大切です。職業訓練プロジェクトでは、難民だった人が日本人専門家の指導を受けて職業訓練のインストラクターになり、他の難民を支える立場になっている姿を見ました。不安定な騒乱の中でも、このように良い循環を生み出していくことが平和への道筋であり、支援とはそのためであると強く感じています。

教育は国づくりの根幹に関わります。日本と途上国、それぞれの教育現場での経験を生かし、これからも途上国の人々が質の高い教育を受けられるよう、力を尽くしたいと思います。